

◀ S · E · L · D · A · A ▶ No. 6

上智大学英語学科同窓会
東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学英語学科事務室気付

昭和61年11月5日 発行

Sophia English Language Department Alumni Association

上智大学英語学科同窓会第1回定例総会開催のお知らせ

公 示

会則第12条第1項に基づき、下記の要領で上智大学英語学科同窓会第1回定例総会を開催いたします。

昭和61年11月5日

上智大学英語学科同窓会
会 長 鈴木 達也

記

日時： 昭和61年11月29日(土) 午後3時30分～4時30分
場所： 上智大学8号館410教室
議題： 1. 総会議長の選任 2. 会務報告
3. 次期会長の選任 4. その他

以上

前号会報においてお知らせいたしました通り、米たる11月29日(土)に本同窓会第1回定例総会を開催する運びとなりました。この総会は、昭和58年12月の設立総会以来初の定例総会ということになります。

上記公示にもありますように、この定例総会では会長ならびに常任委員会より、過去3年間の同窓会の活動についての会務報告をさせていただくとともに、昭和62年1月1日から3年間、同窓会を代表する次期会長を選出させていただくこととなります。

また当日は、上智大学国際関係研究所所長の三輪公忠先生の講演会や、会員相互の親睦を計るために毎年行われているSELDAAPartyも同時に開催することになっており、事務局を中心に準備を進めております。

日頃なかなか母校を訪れるチャンスのない方は、最近の上智大学の発展には目を見張られることでしょう。ぜひこれを機会にご家族同伴で、母校に里帰りしてはいかがでしょうか。ニッセル先生、エバレット先生をはじめ懐かしい先生方も、SELDAAPartyにお顔を出していただけることになっています。

4万人を越える上智大学卒業生のうちの約1割は、私達と同じ英語学科同窓会のメンバーなのです。この同窓会のさらなる発展のためにも、11月29日の総会とSELDAAPartyには皆さんお誘い合わせのうえ、ぜひご出席ください。心からお待ちしております。

昭和61年11月29日(土)

英語学科同窓会第1回定例総会
講演「太平洋をめぐる日米関係」

午後3時30分～4時30分 上智大学8号館410教室

上智大学国際関係研究所 三輪 公忠教授
SELDAAParty

午後4時30分

同 上

午後6時～8時

上智会館5階第6会議室

会費 3,000円 (ご家族同伴の方は4,000円)

三輪 公忠教授 略歴

上智大学文学部英文学科中退、ジョージタウン大学卒業、プリンストン大学博士、歴史学専攻。メキシコ大学院大学およびプリンストン大学客員教授。現在、上智大学国際関係研究所所長、教授。

主な著書 「松岡洋右—その人間と外交」 中公新書 1971年
「現代国際関係論」(共編著) 東京大学出版会 1980年
「再考・太平洋戦争前夜」(編) 創世記 1981年
「日本・1945年の視点」 東京大学出版会 1986年
「第二次世界大戦と現代」(共編) 東京大学出版会 1986年

常任委員会から会費納入のお願い

英語学科同窓会も設立以来まる3年を数え、来たる11月29日には第1回定例総会を開催する運びとなりました。同窓会の運営は、会員の皆さんからの会費によってまかなわれていることはすでにご存知のことと思います。設立時に多くの会員の皆さんから3年分の会費を納入していただいておりますが、11月29日の定例総会時においても今後3年間の会費をまとめて納入していただければ幸いです。また当日ご出席いただけない方も同封の振込み用紙でお振込みいただきたく、ここにお願い申し上げます。

◆会費納入方法

- ◆総会当日に納入される方は、パーティ会費3,000円(ご家族同伴の方は4,000円)と同窓会費3年分6,000円(年会費2,000円)を当日受付で納入してください。
- ◆総会にご出席を予定され、事前にお振込みをご希望の方は、同封の振込み用紙でパーティ会費と同窓会費3年分、計9,000円をお振込みください。
- ◆総会にご出席いただけない方は、同封の振込み用紙で同窓会費3年分6,000円をお振込みください。
- ◆お振込みの場合は、氏名欄に必ず卒業年度を記入してください。
- ◆なお、いままで納入済みの会費についてご質問のある方は、下記の常任委員会会計委員までお問い合わせください。

会計委員 込山 雅弘 03-473-3304 (自宅)

(お問合せは午前9時～午後2時、午後8時～10時の間にお願いいたします。)

第2回野口記念懸賞論文に9人提出

前号の会報にてご案内申し上げました通り、野口基金運営委員会では第2回目の活動として、前回同様英語学科在学生より懸賞論文を募集することになり、本年5月より在学生に応募を呼びかけ、7月12日に応募を締め切りましたところ、3、4年生を中心に計15人の応募がございました。

その後夏休み明けの10月18日に提出を締め切りましたところ、9点の提出がございました。前回の提出数15点に比べ提出数は減少いたしました。在学生からの反応がまずまずであったことにはほっとしております。

分野学年別の応募状況は次の通りです。

言語学： 計3人(4年生：3人)

国際関係論： 計1人(3年生：1人)

人文科学： 計5人(3年生：1人、4年生：4人)

一方、提出されました論文を審査、選考する選考委員につきましては、学科長である楠瀬教授に選考委員長になっていただき、英語学科教員の方々それぞれの専門分野別に審査していただくことになっております。

本懸賞論文の選考結果の発表、賞金授与式は11月29日に予定しております定例総会後のパーティで行う予定です。また、入賞論文のAbstractは次号に掲載する予定です。

なお、1回目、2回目と懸賞論文の募集という形で本基金の運営を行ってまいりましたが、第3回目以降、本基金の趣旨に沿った運営方法につき、ご意見、アイデアなどございましたら、積極的に英語学科事務室野口基金運営委員会までお寄せいただきたく、お願い申し上げます。

ドナルド・メースン神父様、8月23日逝去

9月20日付のニッセル神父様のレターですすでに多くの会員の方がご存じの事と思いますが、英語学科で長らく教鞭をとっておられたドナルド・メースン神父様が8月23日、ガンのためサンフランシスコで亡くなられました。享年61歳でした。

去る10月4日土曜日午後3時から聖イグナチオ教会において、メースン神父様の葬儀ミサがしめやかにとり行われました。当日のイグナチオ教会は卒業生、在学生を始め、メースン神父様ゆかりの方々で埋まり、同僚のS J数十名の共同司式によるミサは出席者の深い悲しみにつつまれました。

上智大学英語学科同窓会といたしましても、この会報を通して会員の皆さんとともにメースン神父様のご冥福をお祈りするとともに、故人と特に親しくしておられた2名の会員から寄せられた追悼の言葉を掲載して、深い哀悼の意を表します。

Fr.メースンの笑顔

矢沢 神明(47年卒)

Fr.メースンはどんな時でも笑顔で断やさない人で、学生時代に二、三度叱られた時を除けば、いつでも必ず笑顔を湛えていた。久しぶりに会った時でも相手を包み込んでしまうようなあの笑顔を見ただけで、何となくホットするような気がしたものである。そして実際に顔を見なくても、彼からもらう手紙は行間から例の笑顔が浮んでくるようであった。

昨年暮、聖母病院に見舞った時には既に病魔が彼の全身を蝕み尽くしていた(文字通りの骨の髄までの激痛に、アメリカの病院から持ち帰ったという強い痛み止めを飲まないで夜も眠れないことがあったそうである。)に

もかわからず、面会中ずっと笑顔を通り越して、逆にこちらが慰められているような錯覚をした。こんな時にも笑顔を通り越さない彼のことは充分知っていたはずの自分も、この時の様子から不覚にも快癒はしないまでも、このまましばらく小康を保つのではないかという甘い期待を抱いた。

聖母病院以来、別段容態が急変したとの連絡もないのを良いことに見舞にも行かずにいたところ、五月の或る日、所用で近くまで出かけた帰りに大学へ寄ってみた。教授館受付で待っていた自分の前に、何と杖の助けを借りて弱々しげに歩み寄って来たFr.メーソンの姿を見た時には、驚きのあまり思わず声をあげるところだった。わずか五ヶ月前に抱いた甘い期待は見事に裏切られた。見るも無残に痩せ衰え、やつれ果てた姿を目の当たりにして、しばらくは何と言って声をかけたら良いかわからない程であった。過去2年余りの病気との壮絶な闘いに、まさに刀折れ、矢尽きたといった彼の前には、生半可な慰めの言葉は何の役にも立たないと思えた。

しかも、翌日サンフランシスコへ帰るということを聞き、何も知らずに来た自分のお目出たさが恥ずかしくなり、わずか十分足らずの間にどんな話をしたのか良く覚えていない。(後日、自分の冷淡さは棚に上げて、何も連絡を寄こさなかった後輩を叱責したところ、余計な心配をかけるから病状の悪化や帰国のことは卒業生には知らせるなど、Fr.メーソンに言われていたそうである。)イグナチオ教会の前で最後の別れの挨拶をする時にも、淋しげながらもやさしく笑っていたFr.メーソンに対し、自分は顔がこぼれて満足に笑顔も作れなかった。

九月九日にFr.ドイルの好意により、ドラマ関係の卒業生、在校生が集まり、クソハイムでミサをあげて頂いた。(Fr.メーソンの後継者としてFr.ドイルという良き指導者に恵まれたことは、ドラマのOBとしてまことに喜ばしいことです。)昔このクソハイムで忙しそうに壁紙を貼り変えたり、ペンキを塗りにかえたりしていたFr.メーソンの姿を思い出して、中に入った時には既に鼻の奥がきな臭かった。だから祭壇前に飾られた、発病前の元気な頃に撮ったという写真はとどめを刺すのに充分であった。あの笑顔を見た途端、彼に出合ってから今日までの約二十年間の出来事が次から次へ思い出され、二十年の時の重みと、失ったもののあまりの大きさに、みっともない話だが涙を止めるのに苦労した。

人間は誰でもいろんな顔を持っているもので、状況や場面に応じて無意識のうちにそれぞれ使い分けている。ところがFr.メーソンに限っては、神父として、大学教授として、あるいは演出家として人に接することは決してなかった。(そういうことが出来ない人だった。)いつ、いかなる時も、又は誰に会う時も、そこにいるのは人間メーソンであった。それがあの笑顔となって出て来たのであろう。

我々は不幸にもあの素晴らしい笑顔の持主を失ってしまったが、幸運なことに彼はあの笑顔を我々の胸の中に残していった。生前、元気のない顔を見せたりすると、決まって運動部の連中が良く使う例の「ファイト！」という掛け声をまねて励まされたものであるが、クソハイムのあの写真もそう言っているような気がしてならなかった。

Fr.ドナルド E.メーソンさんについて

川森 雅仁 (58年卒)

メーソンさんは小さな事と大きな事が同時に見える不思議な人でした。その広さと深さと細かさはとても筆舌に尽せません。

彼はSymmetryとmonotonicityがきらいでしたが、それ以上にContradictionをにくんでました。Symbolismが好きで極端なrealismが好きではありませんでした(彼の顔がE・カッシーラと似ている事とは無関係でしょう。)メーソン先生の人生は彼の好みを直接反映したものだったのかもしれませんが、モンタナ生まれのサンフランシスコ育ち、そしてハーバード大学とメーソンさんはアメリカの様々な部分の代表のような人でした。

メーソンさんを思う時、私はまず劇の演出家、俳優としての彼を思います。劇は先生の人生の中で本当に大きな部分を占めていました。彼の卓越した演技力は学生を教える時にも遺憾無く発揮されていました。70年代には、Sophia English Theatrical Society (SETS)、そして、1978年以後はSophia Model Production(SMP)のDirectorとしてその本格的な芸術性、表現力を世に認められていました。

メーソン先生のDirectorぶりについて高名な英国の演出家ピーター・ブルックの9月のワークショップに参加したある英国人俳優がこう言っています。「ブルックが舞台に立った時、私は一瞬、Fr.メーソンの亡霊を見ているのかと目を疑いました。彼の容姿、立居振舞いは本当にFr.メーソンにそっくりでした。」

メーソン先生の監督としての実力は昨年12月のSMP第13回公演「A midsummer Night's Dream」に浩宮様がいらして学内外から注目をあびるようになりましたが、それ以外の多くの珠玉のような作品群は学生演劇の一点をなすものです。

メーソン先生の鋭い審美観は劇だけでなく全ての芸術をその射程におさめていました。その関心、興味の広さと深さにはいつも驚かされていましたし、それ故先生の育てられた人の中に舞台や芸術など創造的な仕事についている人が多いものなづけです。

しかしながらその学術的芸術的な卓越以上に私の中にあるメーソンさんは人間性あふれる愛の人という想いをおこしてくれます。このことは先生に接した誰もが皆認める所でそれ故にこそ先生の回りには多くのすばらしい人が集まったのだと思います。

メーソンさんの愛は特に病気になられてから、真にメーソンさんの目ざしたmartyrのものでした。その雄々しさはイエス・キリストその人のものにも匹敵したと思います。

最後の一週間、私がサンフランシスコの部屋を訪問している間、ほとんど動く事も話す事もできなくなっているが僕たちを世話しようとしていたメーソンさん。数分しか許されていない面会時間にも冗談を言って笑わせようとしていたメーソンさん。メーソンさんの愛と人間的-nessの強さと深さを表わすのに私の言葉は余りに貧弱です。

最後に会った時メーソンさんはこうおっしゃいました「Love, my dear, bring back love to everybody. When I think of them, my speech comes back. I no longer am speechless. I will never forget them.」

肉体の檻から開放されてメーソンさんの精神はまたそのすばらしい感性と愛と人間性で大きな物から小さな物まで観ているのでしょうか。メーソンさんにとっては「放蕩息子」のようなものだった私ですが、メーソンさんの教え伝えた「愛」と「人間的-ness」が上智のみならず世界に栄えるよう非力ながらも努力したいと思っています。

最後にメーソンさんが好きだった歌を彼のメッセージとしてのせたいと思います。

Lord hear our prayer.

KEEP SMILING!

And I never thought I'd feel this way
And as far as I'm concerned
I'm glad I got the chance to say
That I do believe I love you.

And if I should ever go away
Well then close your eyes and try
To feel the way we do today
And then if you can remember

Keep smiling, keep shining!
Knowing you can always count on me
For sure
That's what friends are for!

For good times and bad times
I'll be on your side for evermore
That's what friends are for!

Well you came and opened me
And now there's so much more I see
And so, by the way, I thank you!
And then for the times when we're apart
Well then close your eyes and know
The words are coming from my heart--

Keep smiling, keep shining!
Knowing you can always count on me
For sure
That's what friends are for!

幹事会報告

会報第5号での幹事会報告の後、現在までに1回の幹事会が開催され、下記の議題が討議、承認されましたので、ご報告いたします。

◆昭和61年度第2回定例幹事会

昭和61年10月25日開催

1. 会計監査員の選任

下記の2名が会計監査員に選任された。(敬称略)
吉田 正明 (44年卒)
陶山 仁 (60年卒)

2. 第1回定例総会について

鈴木博文事務局長より昭和61年11月29日に予定されている第1回定例総会について、その詳細と運営方法などの説明があった。(くわしくは、この会報P1をご覧ください。)

メッセージ

「こころ」の時代

関原滋彦(49年卒)

昨年11月、5年半近くに恒るマニラ(フィリピン)での生活を終えて帰国した。日本から送られて来る新聞を読むながら、日本の社会、生活がめまぐるしく変化している事を、文字を通して知ってはいたが、実際に住みだしてみると、その物量の多さと、質の高度化、複雑化に驚かされ、とまどいすら覚えたものである。「飽食の時代」という言葉があるが、「モノ」に恵まれ過ぎて、何か本質的な価値感を忘れてしまっている様な気がしてならないのだが、これは私の「海外ボケ」の後遺症なのだろうか? 「国際化」が強く求められている今日だが、同時に「美しい日本人」としてこの「こころ」のあり方を、じっくりと考えてみる時だと思う。「モノ」のない時代には、お互いに助け合って生きる喜びの「こころ」があった。「モノ」に恵まれた現代の日本人が、同じ「こころ」を持って世界の人々と接する事が出来れば、と自省する今日この頃である。

訃報

去る7月31日、80—50クラスの堀内秀一さんが逝去されました。享年27歳。 故人のご冥福をお祈りします。

59年卒(80—50) 小亀 俊郎

鈴木達也会長の指名を受け、昭和59年1月28日の第1回定例幹事会で承認されて同窓会の運営に当たってきた常任委員会は、今年12月31日をもって3年間の任期を満了いたします。第1期常任委員会の委員は下記の通りです。

会長	鈴木 達也 (38年卒)	
副会長	鈴木 禮子 (41年卒)	吉田 研作 (47年卒)
	鈴木 博文 (49年卒)	—事務局長兼務—
常任委員	橋場 裕子 (49年卒)	込山 雅弘 (50年卒) —会計委員—
	込山 博子 (52年卒)	石田 隆司 (54年卒)
	斎藤 資晴 (57年卒)	漆原 朗子 (59年卒)